

母の死

20年前——僕が6歳のとき。

家の近くで一人の女性が亡くなった。

最初の話では、飛び降り自殺だということだったそう。

そう、というのは僕がこのときのことをあまり覚えていないからだ。大きくなって忘れたというより、昔からこの時期の記憶がぼっかりと抜けている。

自殺という話の次に流れた噂はこうだった。

彼女は嘆きのダイヤに呪われたのだ。

あの人は呪われたダイヤを持っていて、そのダイヤに魂を吸い取られた。そんな噂が流れたそう。

そして最後に噂はこう変わった。

彼女は殺された。犯人は阿望^{りんよう}燐葉——僕の母だ、と。

亡くなった女性が人殺しと叫ぶのを聞いた人がいたのだという。その近くで慌てて逃げ去る母の姿を見た人もいたそう。

ほどなくして母は逮捕された。

もちろん、僕はこのときのことも覚えていない。というより、目の前で母が逮捕されたことがショックで記憶を失ったのだと思う。

覚えているのはそれから2カ月後のこと。

母が帰ってきた日のことだ。久しぶりに会った（本当は面会で何度か会っていたはずなのだけど覚えていない）母はひどくやつれていて、とても心配だったのを覚えている。

母が帰って来られたのは、警察が誤認^{ごにん}逮捕だと認めたからだった。女性が飛び降りるのを目撃した人物が現れ、母が関わっていないことが判明したのだ。

母は落下現場に出くわしたが、ショックで通報するのを忘れてその場を去ってしまっただけ、ということだった。

誤認逮捕だとわかって世間の目は冷たかった。

警察の発表は小さく小さく新聞の隅に載ったっきりで、出歩けば周りの人が母を見て距離を取った。人殺しだとひそひそ囁き合っていた。

母が亡くなったのはそれから半年後だった。元から体が弱かったのに加え、^{こうち}拘置生活の負担^{たた}が祟ったのだろう、と医者には言っていた。

僕の頭の中では、いつ聞いたのかも覚えていない、母の「何も怖いことはないから」という言葉がこだましていた。

父からの呼び出し

父——阿望^{つよし}剛が宝石展を開くから手伝えと言い出したのは、今年の11月のことだった。

父は阿望工業の創業者で社長だが、もうそこまで実務に関わっている訳ではない。今の父の一番の仕事は、僕に会社を継がせるために色々と指導することだった。

だから父がしばらく会社を離れても問題はない。そして僕には所属する部門の仕事があるが、社長である父が言うなら問題はないはずだ——というのが父の言い分だった。

そしてそんな訳がない、というのが僕の言い分だ。年末に向けて忙しくなるのに、ここで僕が抜けたら業務がどうなるかわからない。ただでさえ人が足りていないのだ。引き継ぎするにしても時間が少な過ぎる。

そんな僕の心配をよそに、父は勝手に宝石展の段取りを決めてしまった。

わずかばかりの抵抗として一部業務の引き継ぎと、会社になくてもいつでも電話には出るからと部署の人間に告げてから、僕は宝石展の準備に向かうことにした。

宝石展が開かれるのは温泉地として有名な箱根^{はこね}の美術館だった。

東京からでも2時間あれば行くことができる。だから東京から通おうと思っていたのだが、父は僕に断り^{ことわ}もなく旅館を予約していた。

父が手配した旅館に向かうと、そこには家族が揃っていた。父と、それから僕を含めた4人の兄弟姉妹。年末年始と母の命日以外で家族が揃うのは珍しいことだった。

到着した晩——12月の初めだったが、家族で夕食を囲んだ。日長^{にっちょう}兄さんは「久しぶりに高いものが食えるぜ」と言ってお機嫌^{ひすい}だったが、僕と翡翠は違った。

僕は中途半端に引き継いだ仕事の連絡が来るんじゃないかと気が気じゃなかったし、翡翠は父が用意した宿が無駄に高いと怒っていた。

昔から翡翠は無駄遣いにはうるさい。翡翠の儉約家^{けんやくか}ぶりは病的と言っていいほどで、100万円^{もう}儲けたとしても1円無駄遣いするのが許せないタイプなのだ。兄さんも姉さんも比較的ざっくりきっぱりした性格なのに、僕と翡翠は少し神経質過ぎるところがある。

堇青^{きんせい}姉さんは弁護士の仕事が心配じゃないのか見てみると、高い日本酒を持ち込んで結構なペースで飲んでいて、まったく仕事のことは気にしていない様子だ。仕事が心配でありあまり食事が喉を通らない僕とは大違いだった。

そして父はといえば、そんな僕達の様子を見てにこにここと微笑^{ほほえ}んでいた。

嘆きのダイヤ

不穏な空気が流れ始めたのは、12月の中旬。

本格的に宝石展の準備が始まった頃だった。

僕達はまず会場の設営と展示会の宣伝に着手した。堇青姉さんが宣伝、日長兄さんがスタッフの調達、翡翠が設備の調達。僕の仕事は会場のレイアウトやシフトの決定だった。

作業を初めてすぐ、僕達はこの宝石展の目玉を知った。

嘆きのダイヤ——呪われたブルーダイヤモンド。

それは母が誤認逮捕された事件で、飛び降り自殺した女性が持っていたダイヤだった。

どうして父が嘆きのダイヤを手に入れ、宝石展の目玉に据えようとしているのか。僕にはわからなかった。理由を尋ねると、父は「あれは私にとって、私たち家族にとって特別なダイヤなんだ」と言った。

父の言葉の真意はわからなかったが、確かに嘆きのダイヤは不思議な宝石だった。見ていると吸い込まれそうになる。初めて経験する感覚だった。

年の明けた1月10日。嘆きのダイヤを展示するメインホールが少し物足りないということで、大きなシャンデリアが飾られ、会場の設営は完了した。

怪盗ホープの予告状

1月中旬から始まった宝石展は、さほど賑わいはしなかったが、特に大きな問題も起きなかった。

それが突然^{ものもの}物々しくなったのは、2月1日のことだ。

嘆きのダイヤを貰い受ける——怪盗ホープからの予告状が届いたのだ。

怪盗ホープと言え、半年ほど前から^{ちまた}巷を騒がせている美術品泥棒だ。なんでも変装の達人であり、警察でもその正体は^{つか}掴めていないという。

すぐに刑事と、それから嘆きのダイヤに掛けてあった盗難保険の担当者が集められた。

この担当者というのがこれも変わった人物で、^{いぬぼうざき るり}犬吠埼瑠璃という保険会社に雇われた探偵だった。

そもそもは嘆きのダイヤの盗難対策を完璧にしたいという父の要請を受け、盗難保険の会社が彼女を派遣してきたのだ。盗難事件の専門家だと聞かされた。

犬吠埼さんが来たのはちょうど設営が終わり、宝石展が始まる前のタイミングだった。

彼女は数日間に渡って設備やレイアウトを確認し、父の施したセキュリティに^{たいこばん}太鼓判を押した。これなら怪盗ホープが来ても盗むことはできないでしょう、と。

もちろん、このときはたとえ話として怪盗ホープの名を出しただけだった。それがどういう訳か、本当に予告状が届いてしまったのだ。

2月1日のうちに改めて警察による会場設備の見直しが行われた。

警察の出した結論は犬吠埼さんが出したものと同じだった。セキュリティは完璧。それにそもそも、怪盗ホープは今まで予告状など出したことがないので、今回の予告状が本物かどうかはわからない。

なら警察は帰るのかと思ったら、会場を確認しに来た刑事・黒岩鋼^{くろいわこう}は、念のため刑事を何人か会場に張り込ませると主張した。

それに警察嫌いの姉さんと、それから父が反対して、結局は黒岩さん一人だけが会場に張り込むことになった。

警報の誤作動

刑事・黒岩さんが来てから間もない2月3日。

別館の火災報知器に誤作動が起きたと聞いたが、嘆きのダイヤがある本館の話ではないのであまり気に留めなかった。

日長兄さん、あるいは黒岩さんがこっそり別館で煙草を吸っていたのかもしれない。日長兄さんは言わずもがなだけど、黒岩さんも喫煙者らしく、よく展示会場（メインホール）を手ぶらで出ていく姿を見かける。たぶん、煙草休憩に出ているのだろう。

異変

普段は心配性の僕が警報の誤作動をあまり気にしなかったのは、もっと気になることがあるからだ。

それは僕自身のことだ。

嘆きのダイヤを初めて見た日から幻聴が聞こえるのだ。ありもしない声が。

人殺し――。

そんな声が嘆きのダイヤから聞こえてくる。

次第に声は強まり、それにつれて別の異変も出るようになった。記憶が飛ぶのだ。気付くと1時間近く経っている。そしてその間のことを覚えていない。そんなことが度々あった。

2月9日のことだ。

いつもより早めに嘆きのダイヤのあるメインホールに行くと、ホールにいるのは父だけだった。それにも関わらず、父は誰かと話している。最初は電話だろうと思ったが、近付いて違うと気付いた。

父は嘆きのダイヤに話しかけているのだ。

父さん、と思わず言葉が漏れる。父は振り返ってバツの悪そうな顔をした。

「とても大切な……そうだな。お前たちと同じぐらい大切なダイヤだからな」

父はそう説明になるような、ならないようなことを言った。

ただし、と父は無理矢理に話を変える。

「もし私に何かあったら、このダイヤを形見だとは思わなくていい。保険会社に回収してくれるよう頼んであるから、お前たちは下手に触らずこのままにしておくんだ」

そう言って父はメインホールを出ていった。

嘆きのダイヤが紅に染まる

事件当日の2月13日。

僕は12時半頃に会場へ向かった。本館の金庫室に貴重品をしまい（この金庫室は僕達家族の他にも、宝石展スタッフ、それから警備担当の犬吠埼さんと黒岩さんも使用している）、嘆きのダイヤが展示されているメインホールに向かう。

メインホール唯一の出入り口であるセキュリティゲートには警備員が二人いるので、片方に免許証を見せて本人確認してもらう。それからスマホと指輪を小物入れに置いた。ゲートが金属検知器を兼ねているからだ。

ゲートをってからスマホと指輪を受け取る。

指輪は小さなダイヤが付いたもので、父の発案で宝石展の間は、家族の全員がダイヤの付いた装飾品を身に着けることになっていた。

到着したのは家族では僕が一番のようで、ホール内にはスタッフが数名いるだけだった。

挨拶をしてから自分の持ち場につく。持ち場と言っても、展示会中はできるだけメインホール内にいて欲しいという父の要請に従って、ホール内で適当に立っているだけだ。

宝石の解説が欲しいというお客さんがいれば兄さんに、宝石を買いたいというお客さんがいれば僕が対応することになっている。堇青姉さんも翡翠も宝石には詳しくないのだ。

16時半過ぎ、スマホに着信があった。職場からだ。

僕は慌てて通話ボタンを押すと、通話しながらメインホールを出た。本館を少し出たところで話を聞く。

要件自体は簡単なものですぐに答えて終わった。せっかくなので最近の職場の様子を尋ねると、人が減って大変だがなんとかやっているということだった。

通話を切ってから、ここ最近は職場の心配をあまりしていなかったこと、スマホもあまり確認しなくなっていたことに気付いた。幻聴やら記憶が飛んだりでそれどころではなかったのだ。

その後は特筆^{とくひつ}すべきこともなく宝石展は終了し、後片付けをしていた19時過ぎ。

メインホール内にいるのは僕達家族と、刑事である黒岩さんだけだった。

そこまでは覚えている。

けれど——そこからは記憶^{あいまい}が曖昧だった。

何か軋^{きし}むような音がした気がする。

そして——人殺し、とあの声が聞こえた。

それではっと気付く。

いつの間にかあたりは真っ暗になっていて、嘆きのダイヤが紅に輝いていた。
闇に浮かぶように、嘆きのダイヤが光っている。

人殺し、と声が頭の中にこだまする。

ぞわりと鳥肌が立った。

「やめろ、やめてくれ！」

父の声だった。今度は幻聴ではない。何かに取り憑^つかれたように父が叫んでいる。

その少し後、轟音^{ごうおん}が響き渡った。何か巨大なものが床に叩き付けられる音。

気付けば、もはやその役目を終えたとでも言うように、嘆きのダイヤは光るのをやめていた。

しばらく経って館内に光が戻る。

そこで僕——いや僕達が目にしたのは、落下したシャンデリアの下敷きとなっ^{ことき}て事切れた、父・阿望剛の姿だった。

僕にできること

家族の誰かが父を殺したとは思えなかった。

しっかり者で家族のまとめ役の堇青姉さん。適当なところもあるが面倒見の良い日長兄さん。少し儉約家が過ぎるが家族想いの翡翠。

ただ一人——僕自身を除いては。

事件の瞬間の僕の記憶は曖昧^{あいまい}模糊^{もこ}としてはっきりしない。もしかしたら僕が、という心配は消えなかった。

警察にはこのことは言わなかった。記憶がないというのを、警察が信じてくれるとは思えなかったからだ。

実際、家族だって信じてくれるかはわからない。正直に言うべきなのか、何かわかるまでは隠しておくべきなのか、僕には判断が付かなかった。

今の僕にできるのは、自分のことはさておき、家族の無実を信じるくらいだった。